論　文

騎士社会からの逸脱と復帰
マロリーの「トリストラムの物語」における狂気からの回復 *

長谷川千春　（大東文化大学外国語学部）

Madness, Recovery and Chivalric Society in the 'Tale of Tristram' in Malory's *Le Morte Darthur*

Chiharu HASEGAWA

Summary

This paper examines how madness influences the protagonist knight, Tristram, in Sir Thomas Malory's the 'Tale of Tristram' in *Le Morte Darthur*. Tristram loses his temper after he finds his love Isode sends a letter to another knight, escaping from the court and spending his life with shepherds in the wilderness. Knights from the court find Tristram naked, which suggests that Tristram shamefully loses not only his mental control but also his societal and knightly respectability. Nevertheless, the Arthurian court does not reject Tristram coming back to the court, allowing him to be an honourable knight to fight against his enemies again. Thus, although madness once ashamed Tristram, he has the potential to retrieve chivalric status by revealing his sheer determination for the redemption of dishonourable behaviour and attitude. In addition, a shameful experience of being mentally disoriented enables him to recognise how to be psychologically strong, which also makes him physically strong. This narrative structure also shows that Tristram's miserable ending is omitted in Malory's 'Tale of Tristram', while the source of it illustrates an unhappy conclusion. In this way, Malory focuses on the representation of the hero, Tristram, who overcomes mental difficulty, showcasing the tale as one of the earthly tragic but heroic episodes before the Tale of the Holy Grail, replete with supernatural elements.

* 本稿は平成 26 年（西暦 2014 年）3 月 8 日（土）に法政大学市ヶ谷キャンパスにて開催された英米文化学会第 143 回例会での研究発表の原稿に加筆・修正を加えたものである。

はじめに

サー・トマス・マロリー（Sir Thomas Malory, 1416 年頃～1471 年）の『アーサー王の死』（*Le Morte Darthur*, 1469 年～1470 年）は、アーサー王や彼の騎士たちの活躍と没落を描いた長大な作品である。発見された写本を元に、1947 年にテキストを編纂したウジェーヌ・ヴィナーヴァ（Eugène Vinaver）は、マロリーの作品を 8 篇の独立した物語と考え、以下のように区分けを行った。

第 1 話「アーサー王の物語」
第 2 話「アーサー王とローマ皇帝ルーシアスの物語」
第 3 話「湖のサー・ランスロットの物語」
第 4 話「オークニーのサー・ガレスの物語」
第 5 話「ライオネスのサー・トリストラムの物語」
第 6 話「聖杯物語」
第 7 話「サー・ランスロットとグィネヴィア王妃の物語」
第 8 話「アーサー王の死の物語」

この区分けが示しているように、最初の第 1 話・第 2 話と最後の第 8 話はアーサーが中心に語られる物語であるが、それ以外の中心人物は、アーサー以外の騎士たちである。第 3～7 話においては、自らの武勇を見せるアーサーの役割やその場面は比較的少なく、アーサーは宮廷から旅立っていく騎士たちを見守り、彼らの帰還を待つ役割が与えられている。

本稿で着目する「トリストラムの物語」は第 5 番目に位置し、『アーサー王の死』の中間点となり、重要な部分に位置付けられていることは間違いない。この物語は、作品全体の三分の一ものページ数を有している故に、「トリストラムの物語」自体に独自の主題や問題があると考えられる。マロリーは「トリストラムの物語」を書く上で典拠として、13 世紀古フランス語『散文トリスタン』（Prose *Tristan*）を用いて、『アーサー王の死』に挿入するために六分の一にまで短縮した。このようなことから、マロリーの「トリストラムの物語」には原典にあった内容が凝縮され、様々な要素が混在しながら『アーサー王の死』の中心にあることがわかる。

このような複雑性のある「トリストラムの物語」に関して、研究者はどのようにこの物語を捉えているのだろうか。デレク・ピアサル（Derek Pearsall）はマロリーの「トリストラムの物語」について次のように述べている：

> The book [‘The Tale of Tristram’] has been thought a disappointment, in which Malory’s technique of disentangling the tellable tale breaks down; he finds it impossible to isolate the story of Tristram and Isoude, and impossible on the other hand to handle full polyphonic narrative. There is plenty of vigour and fine writing, but the total effect, it is said, is one of

incoherence.[1]

ピアサルが示しているように、マロリーの物語を伝えていく技術も「トリストラムの物語」を書いていく中では見ることはできない。ピアサルは物語中に力強さなど優れた点も認めてはいるものの、全体的には「トリストラムの物語」を 'incoherence' つまり「支離滅裂」であると評価している。ピアサルの観点を踏まえると、「トリストラムの物語」を『アーサー王の死』に取り入れることが困難であったが、これを行ったことで物語の一貫性が失われたことがわかる。

また、アラン・ルパック（Alan Lupack）は、『アーサー王の死』における「トリストラムの物語」を説明する中で、次のような点に着目している：

> Tristram's book is not only an exploration of knightly fellowship; it is also an exploration of the adherence to another code, that of courtly love. The story of Tristan and Isode is one of the great love stories of all time, and their tale could not be told without a consideration of matters of the heart.[2]

ルパックが注目するのはトリストラムとイソードの 'courtly love' すなわち「宮廷愛」である。『アーサー王の死』において、アーサー王、グイネヴィア王妃、騎士ランスロットの三角関係が見られ、騎士と既婚の貴婦人との愛が問題として挙がることがしばしばあるが、これは「トリストラムの物語」にも同様の問題でもある。ルパックはこの点を強調し、マーク王、イソードそして騎士トリストラムの三角関係があることによって、「トリストラムの物語」を恋愛物語における最も重要なエピソードの一つとしてまとめている。

さらにもう一つ、「トリストラムの物語」において着目すべき問題は、主人公トリストラムの陥る狂気である。たとえばキャサリン・バット（Catherine Batt）はランスロットとの比較を通して、主人公としての役割の相違について分析を行った。レネ・カーティス（Renée Curtis）は、マロリーの典拠である『散文トリスタン』における狂気について他の騎士と比べ、狂気の分類を試みた。パトリズィア・マザディ（Patrizia Mazzadi）は、トリストラムに関する数ある中世ロマンスに見られる狂気を、騎士と愛の関係が発展していく一つの形式であると主張している。またマザディは、中世のトリストラムの狂気の描かれ方を整理した上で次のようにまとめている：

> The image of Tristan, and therefore the image of the knight, has changed over time. In the earlier versions he is able to control the emotions caused by his miserable love for the Queen. He pretends to be crazy, but is not; he pays a social price, compromising his image,

---

1 Derek Pearsall, *Arthurian Romance: A Short Introduction*（Malden: Blackwell, 2003）, p.93.

2 Alan Lupack, *The Oxford Guide to Arthurian Literature and Legend*（Oxford: Oxford University Press, 2005）, p.139.

but he is always clearheaded. In the later versions he becomes entirely a victim, losing self control and being at the mercy of his feelings.[3]

マザディが述べているように、トリストラムの狂気には狂気を装うものもあれば、実際に発狂するものもある。マロリーのトリストラムは完全に精神異常に至るゆえに、マザディの言うように主人公トリストラムを ‘victim’ として解釈することもできる。しかしながら、マロリーのトリストラムが精神の堕落する犠牲者なのかどうかについてはさらなる綿密な分析が必要である。このようにトリストラムと狂気に関して、いくつかの研究はなされているが、未だトリストラムが発狂し騎士社会から離脱する意味や、騎士にとって狂気から回復していくことの重要性は深く議論されていない。

本稿ではバット、カーティス、マザディの議論を踏まえながらトリストラムの狂気について考察するために、まず最初にどのようにトリストラムが狂気に至るかという過程を確認することで、狂気の劇的な効果を明らかにする。次にトリストラムの発狂した後の行動に着目し、ランスロットとの比較もしながら、恥の意識の変化や社会的立場や騎士としての体面を喪失することの問題点を探り出す。最後に、トリストラムの狂気から回復し、理性を保つことができるようになる過程を精査することで、狂気が彼にもたらした名誉挽回する機会の意義を明らかにする。

1. トリストラムの狂気に至る過程

トリストラムの子供時代の経験は、彼の後の騎士としての言動に深く関係している。トリストラムの母親が悲劇的にもトリストラムを出産し命を落とした後、トリストラムは父親であるメリオダスの手によって養育されている。メリオダスは七年後再婚し、何人か子供を授かるが、この再婚した王妃は自分の子供が国を継ぐことができないことから、トリストラムの存在を恨み、彼を毒殺しようと試みる。この計画は結果失敗に終わり、王妃が火あぶりの刑を宣告されるが、トリストラムは継母を処刑させないように懇願し、助ける。この後、トリストラムはフランスに送られ、7 年以上もの間、ことばと武芸を教わっている。このように、自分の命を狙った血の繋がっていない継母に対してさえも慈悲深く、フランスへの留学で養った知識と武術から、若くしてトリストラムが精神的にも肉体的にも成長し優れていることが強調されている。

トリストラムのフランスでの経験は、騎士として経験を積んでいく過程での恥の意識にも強い影響を与えている。この場面が色濃く表れているのが、トリストラムとアイルランドの騎士マーホルトとの戦闘場面である。アイルランドのアングイッシュ王がコーンウォールのマーク王に使いを出し、7 年間支払われずのままの年貢を支払うように要求するが、マーク王はこれを拒絶し、コーン

[3] Patrizia Mazzadi, ‘The Issue of Madness in Tristan Romances’, in *Behaving Like Fools: Voice, Gesture, and Laughter in Texts, Manuscripts, and Early Books*, ed. by Lucy Perry and Alexander Schwarz（Turnhout: Brepols, 2010）, pp.243–58（p.258）.

ウォールから年貢を取るつもりなら、騎士を派遣しコーンウォール側の騎士と戦わせることを提案する。それに応じ、マーホルトがコーンウォールにやってきて、マーク王側の騎士と戦おうとするが、その騎士がなかなか現れない。というのも、マーホルトと戦うものには生涯手厚い待遇が受けられるというお触れにも関わらず、自ら戦おうとする騎士が現れなかったのである。トリストラムはこの様子を聞き、怒り、恥ずかしくも思っている。これをきっかけにトリストラムは叔父であるマーク王に騎士に叙任され、正式にマーホルトとの戦いに向かう。激しい戦が続いた後、マーホルトは頭に打撃を受け、船に向かって逃げ出す。この様子を見たトリストラムは次のように言う：

> ‘A, sir knyght of the Rounde Table! Why withdrawyst thou the? Thou doste thyself and thy kynne grete shame, for I am but a yonge knyght: or now I was never preved. And rather than I sholde withdraw me frome the, I had rathir be hewyn in pyese-mealys.’[4]

この発言にはトリストラムの恥の意識が表れている。まず、アーサー王の円卓の騎士であるにも関わらず、まだ終わっていない戦いから逃げること、さらに若年である自分との戦いから逃げることがいかに恥ずべきことかが強調されている。トリストラムは、逃げ出すことを選ぶよりも殺されたほうがましである、と言い放ち、騎士としてあるべき心意気をマーホルトに説いているのである。アーサー王宮廷の騎士の象徴である ‘sir knight of the Rounde Table’ と問いかけがあることで、アーサー王側の騎士マーホルトと騎士叙任直後の騎士との戦い、という構図が見て取れる。そして死を賭してでも体面を汚すことを避け名誉を守る正々堂々とした若年の騎士トリストラムの行動原理は、既に円卓の騎士として背負った責任を放棄する騎士と好対照をなしている。ここから、トリストラムには既に、騎士として実力のある相手を打ち負かすほどの実力があり、さらには、最初の戦いであるにも関わらず、騎士であることと騎士の恥について述べることができるまで成長していることがわかる。

ところが、自ら恥に対して強い意識を持っているトリストラムは、その意識を失い、自分の精神状態も狂わせることとなる。これは愛するイソードが騎士ケイヒディアスと交した手紙を見つける場面で顕著に表れている。この手紙には、ケイヒディアスの情熱的なバラードが付けられていて、それに対し心を動かされたイソードは慰めのために返事をしていた。トリストラムは、領地も富もイソードへの愛のために捨てたことまで暴露し、イソードが自分のことを裏切ったと感じ、苦しんでいることまで言い放つ。このように、トリストラムは、一方的に被害妄想を持つようになり、自ら城から出ていき、心配する乙女の持ってくる食べ物も食べず、夜になると馬を放し鎧を脱ぎ、荒野にさ迷い出て、木や枝を切り倒す。とある女城主から三か月ほど世話になったにも関わらず、そこからも逃げ出してしまった後の様子を表すトリストラムの描写は、変わり果てた彼の姿を赤裸々

[4] Thomas Malory, *The Works of Sir Thomas Malory*, ed. by Eugène Vinaver, 3rd edn, rev. by P. J. C. Field, 3 vols (Oxford: Clarendon, 1990), pp.382–83. 以下このテキストからの引用は、本文中にかっこ内でページ番号を記す。

に伝えている：

> And than was he naked, and waxed leane and poore of fleyshe. And so he felle in the felyshyppe of herdemen and shyperdis, and dayly they wolde gyff hym som of their mete and drynke, and whan he ded ony shrewde dede they wolde beate hym with roddis. And so they clypped hym with sherys and made hym lyke a foole.（p.496）

まずこの引用では、裸になって痩せ農夫や羊飼いに養われており、さらにはなにか悪いことをすると彼らに棒で叩かれる、そして、彼らによって ‘fool’ のように頭髪を刈りとられているトリストラムの様子が描かれている。この様子を見た騎士ダゴネットは ‘a fool naked’ と描写し、マーク王の執事ディナスはトリストラムを ‘mad man’ と形容していることから、変わり果てたトリストラムには、恥の意識が完全に喪失している。幼少期より騎士としての教育を受け、格上の騎士相手にまで恥の意識を諭していたトリストラムの高邁な精神状態は、ここで消失しているのみならず、服さえも脱ぎ裸でいるところを容易に他人に見られている。つまりトリストラムは、イソードとの愛に不安を感じ、情緒不安定な状態から発狂し、騎士としての自覚さえも完全に失ったのである。羊飼いや農夫たちとの生活をし、さらには彼らに飲食を与えられている様子から、トリストラムの存在場所が変移していく様子も読み取ることができる。それまでは城や戦場など騎士社会を象徴とする場所を行き来していたトリストラムは、やがて森、そして羊飼いや農夫の生活空間へと居場所を変えていく。非騎士階級の者に養われていることから、トリストラムは騎士的な名誉だけでなく、社会的な体面も喪失している。痩せた体や刈られた頭髪は騎士としての内面的な部分だけでなく、外面的な部分でも騎士のそれとは判断できない様子をより強めている。トリストラムは精神的にも肉体的にも完全に騎士社会から脱落したのである。

2. 狂気の騎士トリストラムとランスロット

このような騎士が発狂するという構図は、マロリーの作品中でも騎士ランスロットにあてはまる。ランスロットは、アーサー王が絶大な信頼を寄せる有力な騎士であるが、王妃グィネヴィアとの不倫関係という大きな問題も抱えている騎士でもある。このランスロットが、魔法をかけられ、エレインという女性をグィネヴィアだと勘違いし同衾する場面に狂気の発端が生じる。この事実を知ったグィネヴィアは、ランスロットに強い言葉で宮廷からの追放を命じる。ランスロットは正気を保つことができなくなり、次のような行動をとる：

> [H]e lepte oute at a bay-wyndow into a gardyne, and there wyth thornys he was all to-cracched of his vysage and hys body, and so he ranne furth he knew nat whothir, and was as wylde [woode] as ever was man. And so he ran two yere, and never man had grace to

know hym.（p.806）

この引用が示しているように、ランスロットは自分の体が棘で傷だらけになるのも気にすることなく、どこに行くかもわからないまま窓から飛び出していく。そして２年間誰からも知られることなく正気を失った状態で生きることとなる。この場面はトリストラムが発狂し荒野や森で生活する部分にも共通する、騎士の失恋とその激情が発端となった発狂と恥の露呈を象徴する部分でもある。

ランスロットとトリストラムの狂気の類似点は多くの研究者によって分析されている。たとえば、ドナルド・シューラー（Donald G. Schueler）はトリストラムとランスロットの武勇、主君への忠誠心、主君の妻との恋仲関係に同一性を見ている。同様に、ヘレン・クーパー（Helen Cooper）も彼らの情熱的な愛や狂気の状態の中においても発揮される戦闘能力などに類似点を見出している。シューラーやクーパーらが指摘しているように、ランスロットとトリストラムの狂気の様子は物語の発展の過程において、基本的に同様のものであると考えられる。

但し、彼らの狂気は全くの同一ではない。シューラーは、ランスロットに起こるできごとはアーサー王宮廷の没落に密接に関わっている一方、トリストラムの運命はアーサー王宮廷には主として関係がないと述べている。そして、キャサリン・バット（Catherine Batt）はランスロットとトリストラムの違いについて次のように説明している：

> While Tristram's experience relates to the social channelling of human emotion, Lancelot's madness becomes the occasion of the Grail's manifestation as transcendental divine mercy, and concerns the hero's place in the broader spiritual scheme.[5]

ここで特に興味深いのは、ランスロットの狂気が聖杯とも深く関係している点である。ランスロットの狂気は聖杯の奇跡によって回復するが、トリストラムの狂気からの回復は聖杯の奇跡とは全く関わりがない。トリストラムはマーク王のもとで超自然的な要素に頼ることなく自然に狂気から回復している。これについてカーティスは、『散文トリスタン』における狂気からの回復について言及し、魔法や超自然的な効果を使用するよりも、現実的な過程で狂気から回復していることを主張している。[6] このように、トリストラムとランスロットの二人の狂気について着目すると、狂気という分岐点を経て二人がアーサー王宮廷、もしくはそれ以外の世界でどのような性質を持った騎士として存在しているのかが明らかになる。

こうすることで、『アーサー王の死』の構成と狂気の関係についても見えてくるものがある。「ト

---

5 Catherine Batt, *Malory's* Morte Darthur: *Remaking Arthurian Tradition*（New York: Palgrave, 2002）, pp.103–29（p.117）.

6 Renée L. Curtis, 'Tristan Forsené: the Episode of the Hero's Madness in the *Prose Tristan*', in *The Changing Face of Arthurian Romance: Essays on Arthurian Prose Romances in Memory of Cedric E. Pickford*, ed. by Alison Adams, Armel H. Diverres, Karen Stern and Kenneth Varty（Cambridge: D.S. Brewer, 1986）, pp.10–22（p.21）.

リストラムの物語」が終わる前に、トリストラムの動向とは関係のない「ランスロットとエレイン」の物語が組み込まれている。これによって、「トリストラムの物語」を終える前に聖杯の奇跡が深く関係するランスロットの狂気を読み手に伝えることができる。騎士の狂気が媒介となり、ランスロットの狂気からの回復には聖杯探求の超自然的な物語への橋渡しの役割があることがわかる。

3. トリストラムの帰還：名誉挽回

トリストラムを中心に騎士の狂気を分析する際興味深いことは、騎士が狂気を経て、騎士社会に帰って来ることが許されていることである。『アーサー王の死』における騎士としての規律は、あくまでも殺人や正当な理由のない争いを避けることであり、恥や狂気には言及していない。まずは、ガウェインが冒険で女性を誤って殺害したことを踏まえ、アーサー王が円卓の騎士たちに伝える次の部分を見てみたい：

> [T]he kynge stablysshed all the knyghtes and gaff them rychesse and londys; and charged them never to do outerage nothir mouthier, and allwayes to fle treson, and to gyff mercy unto hym that askith mercy, upon payne of forture [of their] worship and lordship of kynge Arthure for evermore; and allwayes to do ladyes, damesels, and jantil women and wydowes [socour:] strengthe hem in hir ryghtes, and never to enforce them, uppon payne of dethe. Also that no man take no batayles in a wrongfull quarrel for no love ne for no worldis goodis.（p.120）

ここでは、無用な殺人、不正をしないこと、慈悲深くあること、貴婦人や未亡人のために行動をすること、無意味な争いをしないことが述べられている。アーサー王宮廷の騎士として持つべき行動規範と避けるべき行動がアーサー王によって公式に言い渡されている場面であり、また、アーサー王宮廷の騎士道を形成する重要な部分である。しかし、ここでは不正を避けることは強調されているものの、恥については言及されていない。登場する騎士たちは、しばしば、恥ずべきことを避けようとするが、アーサー王宮廷の公式の規則として恥を避けることは、成文化も明言もされていないのである。マロリーの『アーサー王の死』においては、精神異常を引き起こし、恥ずべき姿を晒しても、掟破りの騎士として咎められることはなく、それが一種の恋愛をする騎士にとっての通過儀礼でもあるかのように許容され、また物語を劇化する文学的表現の一つとして表現されているのである。

アーサー王宮廷全体として恥を重要なものとして扱わないことには、恥を味わった後でもそれを乗り越えてさらに良い騎士になって帰ってくることへの期待が込められている。その傍証の一つとして、トリストラムの狂気からの復帰がある。トリストラムは、イソードのことを想う騎士パロミデスが森で彼女に対する熱い気持ちを歌にしているところに出くわした際、強く憤慨し、さらにパ

ロミデスを殺害したい衝動に駆られる。以下がその後のトリストラムの行動である：

> Than sir Trystram remembyrde hymselff that sir Palomydes was unarmed, and of so noble a name that sir Palomydes had, and also the noble name that hymselff had. Than he made a restraynte of his anger, and he wente unto sir Palomydes a soffte pace and seyde,
> '… yf hit were nat for shame of knyghthode thou sholdyst nat ascape my hondys, …' (p.780)

ここではトリストラムが自制心を持って行動できているところに注目できる。パロミデスが武装していないこと、そしてパロミデスが高貴な身分であり、自分自身も高貴であることを思い出すことで、トリストラムは怒りを抑えることができている。以前トリストラムはイソードに対する強すぎる愛とそれに由来する嫉妬が引き起こす怒りを露わにしていた。トリストラムはここから情緒が不安定になり発狂したが、ここではそれを堪え、自分の高貴さを鑑み、自制する理性を得ることができたのである。バットは、トリストラムが狂気の間社会的に隔離された存在だったことを強調しているのと同時に、狂気から回復するトリストラムを 're-establishing' と表現している。[7] バットが述べるように、トリストラムは、狂気を経て再び騎士としての自覚を確立させることに成功し、活躍の場に戻ってくる。

マロリーが「トリストラムの物語」で悲劇的な結末を避けたこともトリストラムの狂気から復帰した様子を強調している。これに関してラリー・ベンソン（Larry Benson）は以下のように分析している：

> Malory is finally less interested in the history of Tristram than in the image of chivalry embodied in his career. That is why *Sir Tristram* ends with the hero at the summit of his career, happily in possession of the fair Isode and proved the equal of Lancelot.[8]

ベンソンがここで主張しているように、マロリーは原典に忠実であることよりも、トリストラムの騎士としての経験や、それがランスロットという最高の騎士にも匹敵するように描くことを選んだのである。「トリストラムの物語」の前に位置されている「ガレスの物語」も完全無欠の騎士の様子を描いたものであるが、「トリストラムの物語」では狂気という劇的な主人公の変化を描いている。さらにそれがランスロットの例に見られる聖杯の奇跡とは関係のない自然な回復であり、最終的に理性を取り戻している。マザディがトリストラムを一種の犠牲者として見ていたことは、トリストラムの発狂の様子や悲劇的な結末を考慮すると十分可能な視点である。しかしながら、少なくともマロリーの「トリストラムの物語」においては、発狂を経た後でも騎士としての体面を再び意

7 Batt, *Malory's* Morte Darthur, p.117.
8 Larry D. Benson, *Malory's* Morte Darthur (Cambridge: Harvard University Press, 1977), p.115.

識し、活躍している故に、単なる狂気を経験した犠牲者として捉えることはできず、むしろ、狂気を経験できたからこそ、ベンソンの言う ‘re-establish’ した姿を見せることができたのである。

おわりに

本稿では、マロリーの「トリストラムの物語」に見られる主人公の狂気やそれに関する騎士社会からの離脱と復帰を分析することによって、3つのことを明らかにした。まず、トリストラムをランスロットと比べることで、騎士の狂気の微妙に異なる種類、類似点・相違点があることが判明した。次に、アーサー王宮廷が全体としては個人の恥や精神状態には介入せず、これに関する失敗から復帰できる可能性を残した規律を設けていることを見出した。そして、マロリーの「トリストラムの物語」が原典の結末とは異なり、理性を得たトリストラムの姿を強調することで終わる、主人公の描き方の改編があったことを見た。

このように議論をしてきた結果、次のような結論を導きだすことができる。『アーサー王の死』において、凋落した騎士がそこから名誉回復するには、自らの失敗を自ら乗り越えることが求められている。いくら宮廷が公式に恥を最も重要視していないとしても、それを自分の過ちとして顧みて、再度その過ちを繰り返さないように自制する気持ち、そして本能のまま動くのではなく、社会的立場を考慮し、理性を重んじることこそ、騎士にとって必要不可欠な資質である。マロリーは、トリストラムの狂気を通じて、騎士の精神異常がいかに劇的で理性を失わせる現象かを描くと同時に、狂人となった騎士を完全に排除するのではなく、再度騎士社会に復帰させる機会を与えているのである。

参考文献

第一次資料

Lacy, Norris J., ed. *Lancelot-Grail: The Old French Arthurian Vulgate and Post-Vulgate in Translation*, 5 vols（New York: Garland, 1993–96）

Malory, Thomas, *The Works of Sir Thomas Malory*, ed. by Eugène Vinaver, 3rd edn, rev. by P.J. C. Field, 3 vols（Oxford: Clarendon, 1990）

de Troyes, Chrétien, *Arthurian Romances*, trans. by William W. Kibler（London: Penguin, 1991）

第二次資料

Batt, Catherine, *Malory's* Morte Darthur*: Remaking Arthurian Tradition*（New York: Palgrave, 2002）

Benson, Larry D. *Malory's* Morte Darthur（Cambridge: Harvard University Press, 1977）

Cooper, Helen, ‘*The Book of Sir Tristram de Lyones*’, in *A Companion to Malory*, ed. by Elizabeth Archibold and A.S.G. Edwards（Cambridge: D.S. Brewer, 1996）, pp.183–201

Curtis, Renée L., 'Tristan Forsené: the Episode of the Hero's Madness in the *Prose Tristan*', in *The Changing Face of Arthurian Romance: Essays on Arthurian Prose Romances in Memory of Cedric E. Pickford*, ed. by Alison Adams, Armel H. Diverres, Karen Stern and Kenneth Varty (Cambridge: D.S. Brewer, 1986), pp.10–22

Doob, Penelope B.R., *Nebuchadnezzar's Children: Conventions of Madness in Middle English Literature* (New Haven: London Yale University Press, 1974)

Fitzhenry, William, 'Comedies of Contingency: Language and Gender in the 'Book of Sir Tristram'', *Arthuriana*, 14.4 (2004), 5–16

Gibson, Angela, 'Malory's Reformation of Shame', *Arthuriana*, 11.4 (2001), 64–76

Kay, Sarah, 'The Tristan Story as Chivalric Romance, Feudal Epic and Fabliau', in *The Spirit of the Court: Selected Proceedings of the fourth congress of the International Courtly Literature Society*, ed. by Glyn S. Burgess and Robert A. Taylor (Cambridge: D.S. Brewer, 1985), pp.185–95

Lupack, Alan, *The Oxford Guide to Arthurian Literature and Legend* (Oxford: Oxford University Press, 2005)

Lynch, Andrew, 'Beyond Shame: Chivalric Cowardice and Arthurian Narrative', in *Arthurian Literature XXIII*, ed. by Keith Busby and Roger Dalrymple (Cambridge: D. S. Brewer, 2006), pp.1–17

Mahoney, Dhira B, 'Ar ye a knight and ar no lovear?: The Chivalry Topos in Malory's *Book of Sir Tristram*', in *Conjunctures: Medieval Studies in Honor of Douglas Kelly*, ed. by Keith Busby and Norris J. Lacy (Amsterdam: Rodopi, 1994), pp.311–24

---, 'Malory's "Tale of Sir Tristram" : Source and Setting Reconsidered', in *Tristan and Isolde: A Casebook*, ed. by Joan Tasker Grimbert (New York: Routledge, 2002), pp.223–53

Mazzadi, Patrizia, 'The Issue of Madness in Tristan Romances', in *Behaving Like Fools: Voice, Gesture, and Laughter in Texts, Manuscripts, and Early Books*, ed. by Lucy Perry and Alexander Schwarz (Turnhout: Brepols, 2010), pp.243–58

McDonald, Jill P., 'Chivalric Education in Wolfram's Parzival and Gottfried's Tristan', in *The Study of Chivalry: Resources and Approaches*, ed. by Howell D Chickering and Thomas H Seiler (Kalamazoo: Western Michigan University, 1988), pp.473–90

Newstead, Helaine, 'The Enfances of Tristan and English Tradition', in *Studies in Medieval Literature: In Honor of Professor Albert Croll Baugh*, ed. by MacEdward Leach (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1961), pp.169–85

Norris, Ralph, *Malory's Library: The Source of the Morte Darthur* (Cambridge: D. S. Brewer, 2008)

Pearsall, Derek, *Arthurian Romance: A Short Introduction* (Malden: Blackwell, 2003)

Rumble, Thomas C., '"The Tale of Tristram" : Development by Analogy', in *Malory's Originality: A Critical Study of* Le Morte Darthur, ed. by R. M. Lumiansky（New York: Arno Press, 1979), pp.118-83

Singer, Sarah, 'From the Roman de Tristan en Prose to Malory's 'Tale of Tristram': A Comparison of Two Worlds（unpublished doctoral thesis, University of Wales, Bangor, 2002）

佐藤輝夫『トリスタン伝説 : 流布本系の研究』（東京：中央公論社、1981 年）

清水阿や「トリストラムとイソウドの物語―サー・トマス・マロリ「アーサーの死」における」『大東文化大学紀要 人文科学』21 号（1983），157-172

小路邦子「マロリーにおけるアーサーとマルク :「トリストラム」の意義について」『成城文藝』113/114 号（1985），165-185

中山眞彦『ロマンの原点を求めて :「源氏物語」「トリスタンとイズー」「ペルスヴァルまたは聖杯物語」』（東京 : 水声社、2008 年）

『フランス中世文学集 I：信仰と愛と』新倉俊一、神沢栄三、天沢退二郎訳（東京：白水社、1990 年）

森ユキエ「「円卓の騎士団」その栄光と没落 : マロリー「トリストラム卿の書」より」『比較文化研究』（日本比較文化学会）67 号（2005），21-29

ミュリエル・ラアリー『中世の狂気―十一～十三世紀』濱中淑彦監訳（京都：人文書院、2010 年）

（2018 年 9 月 27 日受理）